

「天命に安んじて人事を尽くす」—清沢満之の求道における根本課題としての自己と他者— (前半部分)

加来雄之先生 (大谷大学)

難度会臘扇忌法要 2016/06/03

前半部分

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏...

人身受けがたし... (三帰依文)

こんばんは。難度会の臘扇忌にお招きをいただきまして、二時間程度のお話をいたしたいと思えます。

題名は「天命に安んじて人事を尽くす」という清沢満之先生の非常に有名な言葉だと思えますが、一度聞いたら忘れることのできない言葉だと思えます。その言葉の意味を受け止めなおしてみたいというのが今日の私の課題なのですが、副題として「清沢満之の求道における根本課題」というテーマをつけさせていただきました。実は、レジュメの方は少し違った題となっていて、言葉が加わっています。「清沢満之の求道における根本課題としての自己と他者」というね、「自己と他者」という言葉が付け加えられておりますのは、実は「自己と他者」ということを清沢先生が課題とされた、その一番深い所にある問題というのでしょうか、課題というのでしょうか、その立場というものを今日は尋ねてみたいと、このように思っております。

西方寺様の方からこのような本を出していただいて、今日の記念品だったというように先程聞きまして「ありがたいな」というふうに思っているのですが、2012年にですね、2日間に渡ってお話したことの初日の分だけをテープ起こししていただきまして、それをもとに少し校正をさせていただいて、出していただきました。本当はもう2012年のうちに原稿をもらっていたんですが、私が怠け者なものですから、返さなければいけないだろうという思いを持っていたんですが、聞いてくださった方が、なにかこう大事な課題というものを読み取ってくださって、そしてこういう形にしてくださいました。私は、なぜこのテーマでお話ししたかと言うと、中にも書いておりますけれども、どうも清沢満之先生の有名な言葉である「自己とは何ぞや」という言葉が、どうもしっかりと受け止められていないんじゃないか...「自己とは何ぞや」というとなんかこう「自分」を見つめる

ような、自分の内面を見つめていくような、自己の問題が大事であって、社会の問題は大事でないとかですね、そういうような感覚でですね、清沢先生の言う「自己」というものを捉えると、実は清沢先生がなぜ親鸞聖人の教えに出会い、その中で歩みつづけられたのか、ということがはっきりしないと思うんですね。それは私にとりましては世親菩薩が「世尊我一心」と言った「我」ですね。その「我」とはいったい何ぞや。そういう問題にも関わってくるわけです。

私には連れ合いがおりまして、その連れ合いが昨年、ちょうど今頃でしょうかね。病気がわかったのは4月27日でしたかね。長崎におりますと電話がかかってまいりまして、電話でですね、午前中に...講演の少し前に電話がありまして、講演が終わったら大事な話がある、と言うんですよね。「大事な話」とはなんだろうかと思ひましてね、「なんだろうか」と言いましたらね、「いや、終わってから話す」とこういうふうに言われたので、講演が終わってからすぐ電話をしました。そうするとですね、ガンが見つかったんですね。6センチくらいの腎臓がんが見つかったので、手術をしないとイケない。6センチは腎臓がんとしては随分大きいようだ、とこういうふうな事があってですね、「もう駄目なのかなあ」とこういうふう思いながら京都に帰りまして、精密検査しますとですね、実は12センチあったんですね。12センチの腎臓がんができておりまして、「もう駄目だろう」と「これでもうお別れだなあ」と僕自身は覚悟しました。幸い手術はうまくいって、いま転移もしていませんので、元気に過ごしておりますけれども、そのときにですね、やっぱり最初彼女がやっぱり死が怖いんですね。死が怖いというよりもまだその時44歳でしたので、一番下の子が中学生、もうすぐ来年高校生だけれども、高校生になるのはもう見れないかもしれない、とこういうふうに思っていたんですね。娘たちの結婚にも出ることができないだろうし、孫ももう見ることができないだろう、と。こういうふうな事があって、泣いて怯えながら暮らしていたんですね。どうしたらいいか、ということで私は「念仏をしたらどうだ」というふうに申して、本人は念仏してました。私に仏教を勉強しているので、色々な話を聞いてくるんですけどね、「あなたの話は全然響かない」と言われましてね、紹介したいいくつかの言葉には、自分の人生というものを見つめ直す機会をもらったようです。そのときに「念仏」の意味というものを私ももう一度ですね、頭では色々知ってはいたんですが、もう一度その「念仏っていったいなんだろう」ということを考えさせられました。

妻の念仏というのはどこかでやっぱり、「この苦しみ、この不安をなんとかしてほしい」、「できるならばこの病気がなかったことにしてほしい」、ある意味では「助けて、助けて」という念仏ですね。それに対して、私はやはり先人たちのお導きがあったおかげだと思んですが、私の言う「念仏」というのは、どちらかと言うと、「今ここにこうしているこの事実に戻り智慧、その智慧に出会いなおさせてください」、「今ここに立つしか自分の救いはないんだから、どうかここに立ち返らせてもう一度今の現実を受け止めるようにさせてください」と、こういう「念仏」になりますね。そういうことを思いながら少し考えていたんですけども、このことは今日の主題ではありませんので、非常に簡単に申し上げますけれども、「なぜ念仏というものが私たちを救うのか」という問題ですね。「念仏してから救われる」ではありませんね。「念仏していることが救いだ」ということが、どうして言えるのか」という問題です。

いくつもの視点があるのですが、一つだけ申しておきますと、法然上人が「ただ念仏して」とこ

う申されたときに、その「念仏」というのはですね、「いつでも、どこでも、だれにでも」できる行なんですね。賢かろうと愚かであろうと、位が高かろうと低かろうと、男であろうと女であろうと、病気であろうと健康であろうと、どういう状況であってもできる行。こういうふうにおっしゃっていますね。実はそのことが非常に大事なんですね。私たちはどんな条件も問わない念仏をしている時に、はじめてあらゆる条件から解放された自分に出遇えるわけです。それ以外は全部「思い」ですよ。どれだけ仏教の勉強をしてもですね、その仏教を勉強した内容は全部「思い」なんですね。「思い」によって人間は助からない。また、妻の例をあげますと、妻が最初のガンを摘出して転移しているかどうかという検査をした時にですね、一週間くらい前からですね、「私の人生は短かったけれども、これが自分に与えられた人生なんだから」というふうに受け止めて、そしてそれまで泣いていたようなこともまったくなくなって、子どもたちにもそういう態度で接するようになったんですね。僕は「ああ、すごいなあ」というふうに思ってたんですが、しかしその検査の2日前になりますとね、また突然泣き始めて、「自分はずっと生きたかった。もう少し子どもたちの成長を見たかった」とこう言うんですね。泣いているのはそれだけじゃないんです。もっと大きな理由はこうですね。「私はあれだけ自分で一生懸命考えて、これが自分の人生なんだからこれを受け止めなくちゃいけないんだ」と。「短くてもこれが私に与えられた人生なんだ」、そういうふうに受け止めようとあれだけ心に決めたのに、どうしてそれが壊れてしまったんだろう。僕は言いましたね。「思いで作ったものは必ず壊れるんだ」と。壊れなければ幸いだったかもしれないけれども、でも、「思いによって作り上げた救いというものは必ず現実によって壊れるんだ」と。また「壊れなければならぬんだ」というようなことを言っていたことなんですね。

病気というものもですね、いろんな病気がありますけれども、うちの連れ合いの場合はどこかが痛むというわけではないですよ。見つかったときも、そんなに大きかったけれども、全然痛みがなかったんですよ。聞いて初めて「そんなにひどかったのか」ということですよ。手術した後も多少は痛いですが、しかしながら、麻酔というものが非常に発達していますので、そんなに痛むわけでもない。そして、腎臓がんというのは放射能も効きませんし、抗がん剤も効かないので、ですから何もすることもないんですよ。だから、今もうすぐ一年が過ぎますけれども、毎日毎日薬も飲んでないんです。何もしてない。だから後はもう検査があつて、見つかったらそれに対処するしかないできない。ですから、痛みはないわけです。でもがんは怖い。では、いったい何が怖いのかというと、痛みではなくてですね、むしろ本当に怖いのは実は「世間」なんですね。つまり、「どう思われているんだろうか」と。あまり外に出たがらなくなりまして、一時期ですね、今は違いますが、その時に言っていたのが、「若いのにかわいそうに」というふうに見られるんじゃないか。「あの人かわいそうに、まだ子供が小さいのにね、哀れよね」というふうに見られるのが嫌だと言うんですね。で、僕は「そういうふうにするのは君がそう思ってきたからじゃないか」と言ったら、「そうだ」と言っていましたね。つまり、自分がそう思ってきたから、自分もそう思われるんじゃないか、とって苦しむわけですね。つまり、「病気で苦しんでるんだ」といってもですね、それは、病気の痛みとかじゃなくて、実はその「思い」で押しつぶされそうになっている。つまり、事実を事実として受け止めることができない。だから、「病気に負けたんじゃない、世間に負けたんだ」というね、こう言っているような状況がある。つまり、私たちが生きて様々な問

題に出遇って行く。私の連れ合いの話は、ひとつの一例ですよ。みなさん、もっと大きな病気を
してられる方もおられるでしょうし、きっと愛する方とお別れをしてきた方もたくさんおられる
と思いますので、私が申し上げたいのは、「どんな状況であっても、結局それを苦しめているのは、
私たちの思いなのだ」ということです。「そこに立てないということが、本当の大きな課題なんだ」
と。つまり、時代が変わっても、社会が変わっても、どんな状況であっても、結局私たちはその問
題を本当にきちんと受け止めることができる自分であるかどうか、これが問われるわけですね。

親鸞聖人の生きられた時代と、私たちが生きていた時代、そこにはまったく違った問題があると
思います。でも、どんな問題であっても、例えば、原発の問題というのは鎌倉時代にあるはずがな
い。しかしながら、その問題というものを本当に正しくですね、私たちが受け止めていくというこ
とが、どこでできるのか、という課題、これはいつも変わらないですね。そういう課題というもの
を担っているのが、清沢先生の「自己」という問題です。ですから、清沢先生は、最初から最後ま
でですね、「他者」というもの、または「社会」というものから切り離された「自己」というものを
考えられたことは、ただの一度も私はないと思います。そういう「自己とは何ぞや」ということを
明らかにするために、私はここにこう「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉を取り上げて、
清沢先生がこの他力の教えというものによって得られた、その智慧というんでしょうかね、この人
生というものを生きていく立場というものをですね、どういうものであろうか、ということを考えて
みたいと思います。

今言ったようにですね、「お念仏」ということですね。念仏をするところにはじめて私たちはそ
の「自己」に出遇えるんですね。念仏をしていないときは、全部私たちは「思い」で生きています。
念仏をしている、その自分にだけ、あらゆる条件というものを超えた自分に出遇える。幸せとか不
幸せとか、そういうものすべて超えた自己というものが「ただ念仏」というところに現在するわけ
ですね。念仏を離れたら、私たちは「思い」の中に取り込まれるしかない、ということですね。

さあ、それではですね。せつかく資料をお配りしておりますので、資料にそいながらお話をし
ていきたいと思ひます。

(座ってお話させていただきます...)

今日ですね、「天命に安んじて人事を尽くす」、このお話は本の中に大体言いたいことは、大まか
な内容ですけども、大雑把な内容ですけども、お示ししてあります。ですので、できるだけこの
本に、もちろんこの本の内容と重なるところはありますけれども、この本に書いたことの背景とい
うのでしょうか、この本を書くときの私自身の視点というのでしょうか、そういうものをみなさん
と一緒に共有できればというふうに思ってお話をしていきたいと思ひます。

あの、1番のところですね... この資料難しいので、これを全部読んでいくというのではありま
せん。大きな流れとしてですね、それとまた、私自身がこれからお話をすることの手がかりにし
ていただければいいと思ひます。

まず、清沢先生という人が、浄土真宗という教えに出遇って、どのような救済の事実というもの
を受け止められたのか。私たちは「お念仏によって救われる」、または、「如来を信ずることによ
って救われる」とはいったどのような事実なのか。こういうことを受け止めなおしてみたいと思
ひます。

現に私たちは今、念仏の教えに出遇っているわけですね。そして、念仏を申しているわけです。でも、その念仏を申しているということが持っている深い意味というものを、本当に受け止めているかどうかです。私はよく感ずるんですよね。「念仏していたら救われるんじゃないか」というですね、そういう期待であったりですね、「念仏というものによって何かこう自分の心が変わっていくんじゃないか」という、そういうような思いで念仏していると、本当の意味で法然上人や親鸞聖人が顕かにしてくださろうとした念仏の救いというものには出遇えないと思うんです。ここでずっと『歎異抄』の講義をさせていただきましたが、その『歎異抄』の講義の第9章のところに、「念仏もうしそうらえども、踊躍歓喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは…」という文章がありますね。念仏しても喜びの心が十分ではない。念仏していても一刻も早く浄土に行きたいという思いがない。心がない。これはいったいどのようにしたらいいのでしょうか、というね、非常に実践的な問に対してですね、親鸞聖人がお答えになっていく。これが第9章なんですけども、唯円様の問題点はどこにあったか。これは、今申し上げましたように、宗教と救いを「心の問題」と思っていたんですね、喜びの心であったり、勇みの心、一刻も早く浄土へ行きたいというような意欲が生まれてくること、これが救いだと思っていた。つまり、宗教は「心の問題」だと思っていたのですね。これはものすごくね、私たちの大きな誘惑なんです。私たちは心を生きていますから、どうしても救いというものを心の事実として欲しい。だから、「深く感動する」と、「ああ、わかった」と、「元気が出るとか」、そういうものとして自分の救いというものを受け止めようとするわけですね。でも親鸞聖人は第9章で、「心に救いはない」ということをはっきり言われるわけですね。では一体私たちにとっての救いとは何なのか。それは、たしかに深い感動であったり、知識であったり、領きであたり、意欲であったり、というものは、私たちの宗教的経験というものに付随してはきます。でも、それは救いの本質ではない。

この「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉は、これは「宗教の救いというものが単に個人の心の問題ではない」ということを私たちに教えてくれると思います。確かにひとつの癒やしというんでしょうかね、安らぎ、そういうものも念仏は与えてくれます。ですから、私も連れ合いに「念仏をしたらいいんだ」と言うときはね、念仏を一生懸命している間は色々な余計なことを考えませんよね。また、念仏していたら疲れてくる。そして、眠るということもありますし、様々な効能がないわけではありません。しかし、「本当の念仏の効能とはいったい何か」という問題ですね。

清沢先生の学びについて、曾我量深先生が次のように教えてくださっています。これはおそらく曾我量深先生が、清沢先生の法要にお話するために準備されたノートに記されていたと思いますが、ここにこう書いています。

清沢師が教へられたる大方針は云何。師は何等の結論を与えられなかった。唯第一歩の方針を与へられた*1。

僕は、曾我量深という先生が清沢先生と出遇った、という出遇い方は、この言葉がよく表していると思います。清沢先生というのは非常に大きな方で、色々な面を持っておられて、お弟子たちも

*1 レジュメ, p. 1, I-(1)-①.

色々な側面から清沢先生に出会い、その清沢先生の一面を受け継いでいく、というところがあります。例えば、暁鳥先生であれば情熱を、多田先生であれば意思を、そして佐々木先生であれば智という問題を、「浩々洞の三羽鳥」と言われたそれぞれの先生が智・情・意といわれるもので受け継いだと、こう言われています。

曾我先生が清沢先生から受け継がれたものはいったい何だったのか。それは「唯第一歩の方針」ですね。最初どちらに向いて歩み始めるか、それだけなんだ。でも、最初の一步ね、最初の一步が一ミリ違えば、それをです、10センチならそれほど差はないかもしれない。でもそれが1キロ、2キロ...10キロとなってくればどんどん差は開いてきますよね。そのように、「私たちがどちらに向かってまず第一歩を踏み出すのか」、そのことを教えてくださったのが清沢先生だ。こういう押さえ方をしておられますね。

...第一はその研究の根本的なことである。何等の教権と臆説や仮定とを離れて直に大道の考究に向ふことである*2。

つまり、清沢先生の学び方というのは非常に根本的であった。つまり、「教権」と言われているもの、「親鸞聖人が言っているから正しいんだ」、これが「教権」ですよ。「誰かが言っているから、ここにこう書いているから正しいんだ」と。「聖書に書いてあるから正しいんですよ」と言う人もいますよね。「臆説」というのは、これは「私たちが頭の中で思い描いたこと」ということですね。そして、「仮定」というのは、「実際には自分は見えていないけれども、そうかもしれない。こうなるだろう」と。「実験はしていないけども...」、とこういうことですね。つまり、そういうものを「離れて」ということは、今現に自分に起こっている事実、そのみに立って教えというものに出遇っていく。そして、その教えによって、今ここにこうしている自分の事実を照らし返して行く。これが清沢先生の学び方であった、と言うのです。僕はこれがさっき言った「念仏」ということにも響き合ってくるんですよ。つまり、「お念仏を申す」ということは、そこにはじてお念仏を申している自分、そこに帰るしかね、自分の帰る場所はないんですよ。それ以外の自分というのは全部「思い」ですから。念仏をしている自分に立ち返って、そしてその自分に与えられている現実というものを受け止める。そしてその受け止め方も教えによって照らし返されていく。

私たちは多くの場合、社会の価値観、世間のうわさとか、評価とか、そういうものを気にしながら生きている。でもそういうものではなくして、教えというものに出遇うということは、「私たちが今ここにこうしている生命(いのち)、様々な人と共に生きているこの生命、それを本当に受け止めていくということ以外ないんだ」ということですね。こういう学び方というものが、やっぱり清沢先生の特徴だった。これは清沢先生だけではなくして、私たち「ただ念仏」とです、教義ではなくして、「ただ念仏」ということが私たちに救う。「教義」が分かったって私たち救われないんだ。「念仏」ということに立つ以外救われないんだと言ってますね。では、何のために学ぶか。それは、その「念仏」ということを見失うような様々な思想というものに対決して、本当に自分が立ち返るその一道というものに立つわけですよ。

*2 レジュメ, p. 1, I-(1)-①.

そのことが次ですね。二つ目。

清沢満之先生の一代の努力といふものは、畢竟ずるに道德というものと宗教といふものの違ひを明らかにするといふことに尽きてをつたやうであります*3。

これは曾我先生の言葉ですが、つまり、清沢先生のお仕事というものは、道德と宗教との違いを明らかにする。私たちはどうもこの宗教と道德の問題というものを、混乱するんですね。例えば、正しい生活をすればきっと私たちは救っていただける。これは「罪福心」ですよ。良いことをすれば幸せになれる。それは、道德というものはなぜ善悪をするのか、善悪をすることによって、悪をすれば罰があたるから、悪い境遇に落ちるから。そして、良いことをすれば幸せな境遇が与えられるから... という形で、思いで、宗教に関わるならば、それは「罪福心」でしかないわけですね。信仰には似ているけれども、信仰とは全く違ったものなんですね。では一体宗教とは何なのだ。私たち人間の人生にとって宗教とは何ぞや。こういう問題を明らかにしようとしたところに、清沢先生の大きな仕事があった。でもそれは、道德というものと宗教というものを区別して、道德を捨てるという意味ではないんですね。清沢先生にとっては、宗教というものがはっきりしてはじめて道德というものも、私たちの人生に持つ意味が明確になってくる、ということなんですね。区別をしながら、ごっちゃになって混乱している。でも、はっきり区別すればそれぞれの役割というものが見えてくる。これが清沢先生のお仕事であった。こういうふうに曾我先生は押さえておられるんだと思います。

〔レジュメ〕2番のところですね。「清沢先生がどうしてその当時そういうお仕事に従事されたのか、そのことを課題とされたのか」というと、やっぱり時代的な状況というものもあったわけです。ここに書いてますように宗教というものが様々な誤解、または謂れなき非難というものに晒されてきました。ここに2つだけ例を出していますね。福沢諭吉さんの「宗教は茶のごとし」*4という有名な言葉があるんですね。宗教はお茶のようなものだ。もちろん、福沢諭吉という方は大分県の中津出身で、西本願寺のご門徒さんの家でもあるんですね。しかし、小さいときから無神論者と言うんでしょかね、実験の心が非常に旺盛でですね、神社の御神体を出してきておしっこかけてみて罰が当たるかどうか確かめたとか、そういう方なんですけども。この「宗教は茶のごとし」と言ったときの状況もあります。つまりそれは、キリスト教というものを再び禁止しようというね、そういう動きがあった時なんですね。その時に福沢諭吉が「宗教は茶のごとし」だと言った。どういう意味かという、ご飯とか... ご飯はこれはもうなくちゃならんもんですよ。食べないといけない。食べないと生きていけない。でも、お茶はなくても生きていける。だから、お茶というのは生活に潤いを与えるものであって、絶対なくちゃならないものではない。だから、宗教はお茶のようなもの。私たちが生きる上で絶対に必要なものではなくして、潤いを与えてくれるものだ。だから、そのお茶であれば、紅茶であろうと、緑茶であろうとかまわない、と言うんですね。紅茶というのはキリスト教です。緑茶というのは日本のね、仏教だったり神道です。どっちでもい

*3 レジュメ, p. 1, I-(1)-②.

*4 レジュメ, p. 1, I-(2)-①.

いじゃないか、と。これが「宗教は茶のごとし」とね、「そう目くじら立てるなよ」というね、こういう福沢先生独特の表現だと思うんですが... おそらく、清沢先生はその言葉を知っておられたのでしょう。「生死巖頭」という論文の中でですね、こうおっしゃってますね。

死生とか生死とかは、茶飯とは異なって必然の事実である。

「お茶とかご飯以上の問題だ」、こういう言い方をしていますね。おそらく、ですから、「宗教という問題は私たちの生きる死ぬの問題であって、そこにはご飯以上の課題というものがあるんだ」、とこういうふうに語っておられる。ではその意味はいったに何か、というのですね。ここに清沢先生がその問題—宗教と道德、宗教とは何ぞや、私たち人間にとって宗教とは何ぞや—ということ明らかにされようとしたお仕事を表にしてあります^{*5}。これは清沢先生が非常に若い時にですね、まだ東大時代に、書かれた表なんですけれども、哲学には二種類ある。純正哲学と特殊哲学。特殊哲学にも論理哲学と実践哲学がある。実践哲学にも倫理哲学と宗教哲学がある。こういったようにですね、実践哲学の中の宗教哲学の中の総関—現代で言えば一般という意味ですね。一般的な—宗教哲学、これに答えたのが『宗教哲学骸骨』、清沢先生の処女作と呼ばれている著述ですね。次に、特殊宗教哲学というものを清沢先生は若いときから書こうとしておられた。その課題に答えられたのが、「他力門哲学骸骨試稿」、これは清沢先生が生きてる間には出版されませんでした。しかしながら、清沢先生は肺結核で血を吐きながら「他力門哲学骸骨試稿」を書かれるんですね。その当時の日記には遺言が書いてあります。もう自分は死ぬと思われたんでしょうね。遺言が書いてある。その中でどうしてもこの仕事だけはしなければいけない、そういう意思を持って著述されたのがこの「他力門...」、「他力門」というのは、他力の教えという意味です。つまり、仏教の中に「自力門」と「他力門」があるけれども、どうして「他力門」という教えというものが生まれてこなければならなかったのか、その問題を「...哲学骸骨試稿」、「哲学骸骨」という方法で語ろうと。ちょっと難しい言葉ですが、この本の中にも書いていますので読んでいただければと思いますが、「哲学」というのは「普遍的な語り方」という意味です。真宗の門徒しか分らない喋り方ではなくて、つまり、ヨーロッパ人であろうと、アフリカ人であろうと、アジア人であろうと、誰でも読めばわかるというような、そういう語り方が「哲学」です。そして、「骸骨」というのは、贅肉も肉も全部剥ぎ取って本当に大事な骨格だけを示す、これが清沢先生の学問の方法なんです。色々なことを調べて、色々なことを膨らましていく学問じゃなくて、「本当になくってはならないものは一体何だ。そのことの本質は一体何だ。それをはっきりと言い当てよう」というのが、清沢満之という先生の学問の方法なんです。

そういう意味で、私は清沢先生のこの「他力門宗教哲学骸骨」ということを通しながら、清沢先生がなぜ「他力門」というものに自らの人生というものを生きていく立脚地を見出そうとされたのか、ということをお話したいと思いますが、すべてお話することはもちろんできませんので、〔レジュメ〕2ページですね、つまり一枚目の右側を見ていただきますと、1番上に「有限と無限」と

^{*5} レジュメ, p. 1, I-(2)-①.

という言葉が書いてあって、そして4番目に「根本の撞着」という言葉がありますね*6。清沢満之先生は、宗教というものの本質を色々な形で言い当てることができるけれども、「私にとって宗教というものは有限と無限の一致である」と、こういうふうには押しえられたんですね。「有限と無限の一致」、つまり、「仏と衆生とがひとつになること、悟っている者と迷っている者、無限なる者と有限なる者がひとつになること、出会うこと、それが宗教なのだ」、とこういうふうには押しえられた。それを、「神と人間」と呼んでいる場合もあるでしょうし、「如来と凡夫」と呼んでいる場合もあるでしょうけれども、でもそれは、「無限なる者と有限なる者との出遇い、これが宗教の本質だ」と。だから、病気を直してくれたりだとか、お金儲けをさせてくれるとか、不安を取り除いてくれるとか、それは宗教のご利益であっても宗教の本質ではないんだ。こういうふうにおっしゃったわけですね。

その「無限」というものを考えるときに、私たちは仏様という方をどういう存在として捉えていますか。よもや、あそこに描かれているような金ピカの方がどこかにおられて、私たちが念仏したら、やがては私にだけ見える形でお迎えに来てくださるんだとは思ってないですよ。では、仏様とは、みなさん、どこにおられるんですか。心の中におられますか。外におられますか。清沢先生は「どちらでもない」とおっしゃいますね。内にもあらず、外にもあらず。では、どこにおられるんでしょうね。それはさっき言った「念仏するところ」におられる。「念仏するところ」に、私たちは仏様に出遇える。そのことはまた後で申し上げますけれども。

「有限と無限」... 私は、箕浦という先生が『清沢満之...』という書物を書かれた中で批判されているんですけども、ありがたい批判をしてくださっているんですが*7、その中で「無限」という問題を扱っており、キリスト教で考える「無限」—まあ「神様」ですね—というものはどういうものかという、「人間とは違うもの」なんです。「絶対他者」と言いますねどね。私たちは「創られたもの」、神様は「創った人」です。だから、神様が無限であったら、私たちは有限ですけども、その無限というものは有限とはまったく無関係の超絶したものです。そういう無限を「神学的無限」—神学、神様の学問ですね—と言います。僕たち、ややもすると、そういう形で仏様を考えていることがあるかもしれませんね。もう一つの無限というのは「数学的無限」というんですけども、これは有限というものがずっと積み重ねていったら... 一から百、百から千、万、十万と...、ずっと積み重ねていったら無限になるでしょう？そういう無限、これを「数学的無限」と言うのです。どちらの無限も仏教の言う無限ではない、とおっしゃいますね。仏教でいう無限とは何かと言ったら、ここに今100人の方がおられる、100人の方がおられてそれぞれがみんな関係を持っていますね、つながっている、そのことが無限なんです。仏教で言うね。だから、無限というのは、私たちの外にあるのでもないし、内にあるのでもなくて、私たちの本当のあり方を「無限」と言うのです。ところが、私たちの思いは、自我という思いで、この100人いたら私と他の99人というふうに切り分けてしか自分を考えてない。だから、先程言った「自己とは何ぞや」という時に、そういう自分をみんな考えるんですね。「他の人とは違う自分」というふうに考える。

*6 レジュメ, p. 2, I-(2)- [三] 有限無限, [四] 根本の撞着.

*7 箕浦恵了『清沢満之と宗教哲学』のことか?, 法蔵館, 2013.

私はかつて『歎異抄』〔講座〕の時もお話したので、『歎異抄』の話を書いてくださった方は繰り返しになるかもしれませんが、「玉ねぎ」の例というのを出すのですね。「自己とは何ぞや」というのは、「自分探し」ではないよということ言うために。「自分探し」というのは玉ねぎを剥くようなもんだと。玉ねぎを剥いたら中に本当の玉ねぎの種みたいなものがあるんだと思って剥くんですね。ところが剥いても何も無い。それを「らっきょう」でもいいじゃないかと言われてね、玉ねぎの方がいいのは、玉ねぎを剥くときは涙が出るでしょ、と。だから、自分探しは辛い仕事だからね、涙を流すから玉ねぎにしたんだと。こう言ってですね... では、いったい玉ねぎってどこにあるんだ、と。剥いてきた皮が玉ねぎですよ。だから、「本当の自分」というのはどこにある、と探しても、どこにもないんですよ。このようになってきた自分が自分なんです。自分というものがどこにあるかじゃない。なってきた、今ここにこうしてなってきた自分が自分なんです。でもそこで終われば仏教じゃないですね。仏教はその玉ねぎというものが玉ねぎになるためには様々な条件が必要だった。肥料が必要だった... 良い土が必要だった... 雨が必要だった... 太陽が必要だった... もしも玉ねぎが、アスファルトの上に置かれていたら、枯れてしまうしかないわけですよ。だから、そういう様々な条件があって、今のあなたがあるということは、すべてを含んで「自己」なんです。そういうものから切り離された「自己」というものは、自分の思いの中で作った自己でしかないわけです。だから、そんなものをどれだけ見つめても本当の自己なんてないですね。だから、「自己とは何ぞや」ということに清沢先生が答えられる時には、あとできちっと申し上げますが、「絶対無限の妙用に乗託する」というですね、その「絶対無限のはたらき」というものに立たなければ、自己には出遇えないですね。そうしないと私たちは、たった一度の繰り返すことのできないこの人生というのを結局思いの中で生きて、自分というの「こういうのが自分だ」という思いで思い込んで、そして他者とも、「ああ、あいつは思ったようなヤツじゃなかった」—そりゃそうだろう、思っていたんだからね、事実と違うわけですからね—、そういう中で生きていくしかないんですね。たった一回の人生を思いの中だけで生きて死んでしまう。こんなに悲しいことはない。これが、清沢先生が言う「自己とは何ぞや」なんですよ。

それで、その4番目に書いている「根本の撞着」*8、私はそこにですね、清沢先生の「他力門」の出発点があると思います。「根本の撞着」というのは、「一番私たちの存在の根本にある矛盾」という意味です。どういう矛盾か。それは、私たちは仏様のはたらきの中にあるでしょうか？真理の中にある。如来の中にある。ここにいる100人の方、どなたか一人でもいいから「私は真理の中にな」という人がおられたらね、「今ここにこうして生きているのだ」という事実、私はそんなものに生きてないという人がいたらね、教えて欲しい。どんなに思おうと、私たちの事実は今ここにこのようにしてあるんです。そして、そういうことに返そうという如来のはたらきがあるならば、如来のはたらきを離れている人は誰もいないはずですよ。それにも関わらず、その生命の事実を受け止めることができている人も誰もいない。だから、病気になれば怖がる。不幸は怖いし、幸せになりたいし、人は羨むし、嫉妬するし、けなされたら落ち込むし、そうでしょう？全然自分の生命を生きていない。これもよく例に出すんです。僕は今日電車で来ましたが、横に座ったちっちゃ

*8 レジュメ, p. 2, I-(2)-〔四〕根本の撞着.

い—立命館の女の子と思うんですけど—その女の子が僕のことを「あ、かっこいいおじいちゃんだ」と言ってくれたら、僕はウキウキしますよね。でも、その女の子が「あ、おじいちゃんくさい」とか言われたらもうなんかね、ちょっと落ち込みますよね。でも僕は変わってませんよね、どっちもね。結局「思い」の中で生きています。これは簡単な例ですけども、しかし、どんなことも考えてみたら〔そのように言うことができますよね〕。仏教を勉強していてわかったと言っても、結局「思い」なんですよね。つまり、一人も〔欠かさず〕如来の中にいる、でも如来を〔常に意識して〕生きているものは誰もいない。これが「根本的矛盾」なんです。これをどのようにして乗り越えて行けばいいのか。ここに宗教の根本問題があるんだ、課題があるんだ。そして、乗り越えたら私たちにどういう事実が与えられるのか。乗り越えて与えられる事実、それを清沢先生は「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉で教えて下さったわけですね。

この〔レジュメの2ページの〕下の(3)番目ですね、一番下を見てもらいますと*9、【「いえども」の自覚】とありますね。つまり、私たちは如来の中にあると「いえども」、煩惱にまなこさえられて*10、見たてまつらず。つまり、私たちは如来のはたらきの中で呼びかけられていながら、自分の「思い」というものにしがみついて、目をくらまされて、その如来の呼びかけに立ち返ることができない。つまり、「我亦在彼撰取中」ですね。「我また、かの撰取の中にあれども」、煩惱にまなこさえられて見たてまつらず...と「いえども」でしょう？「大悲ものうきことなくして、常に我が身を照らしたまう」。つまり、ここに「根本矛盾」というものを超えていく道があるわけです。私は如来の中にある「けれども」—「といっても」ですね—私は如来に出遇うことができない。できない「けれども」、如来は諦めることなく、私を照らし続けている。こういう自覚に立つということが、「根本矛盾」というものを本当に引き受けた宗教的生のあり方なんだ、とこういうふうに教えてくださる。

ですから、自力の教えというのは、矛盾というものを起こしている煩惱、それを断ち切って行く。如来の中にあるという事実だけに帰っていく。でもそうではなくて、他力門というのは、如来の中にある「けれども」私たちは如来に出遇えない。出遇えない「けれども」如来はいつも常にはたらいっている。それを思い出す方法が「念仏」です。そこに立ち返る方法が「念仏」なんです。

そういうふうに押さえて、次ですね。ページ開けてもらいますとですね... もう少しだけお話をしてお休みしたいと思います。

ここに〔レジュメ3ページの〕II番目のですね、【清沢満之の「自己とは何ぞや」】、このことについてもですね、一応まあ(1)番〔「自己とは何ぞや」についての誤解】については簡単にお話をいたしました。で、(2)番ですね。【清沢満之における「自己」】*11、これ次にきちんとお話いたしますが、まず知っておいていただきたいのは、清沢先生が「自己トハ何ソヤ、是レ人世ノ根本的問題ナリ」〔『臘扇記』〕と、こういうふうに書かれています。その時の「じんせい」というのは、人が生きる〔「人生」〕という字ではありません。人の世〔「人世」〕です。「人の世」の「根本問題」です。

*9 レジュメ, p. 2, I-(3) 「いえども」の自覚 — 「根本の撞着」の受け止め方

*10 「煩惱にまなこさへられて撰取の光明みざれども大悲ものうきことなくつねにわが身をてらすなり」。

*11 レジュメ, p. 3, II 清沢先生の「自己とは何ぞや」, (1) 「自己とは何ぞや」についての誤解, (2) 清沢先生における「自己」。

つまり、「生きる」方の人生だったら、私が生まれて死ぬまでの問題でしょう？でも、「人の世」と書けば、それは私だけではない。私が「この世に生きている」ということ、そのことを解決するための「根本問題」ということになりますね。清沢先生の直筆の『臘扇記』には、「人の世」と書いています。そのあと清沢先生は「人の生きる」と書いた「人生」という字も使っておられますし、「人の世」と書いた「人世」も両方使っておられるので、ひょっとしたらこれは清沢先生の書き間違いかもしれない、とも言えますよね。でもそうではない証拠に、清沢先生が「精神主義」という運動を始められるときに、一番最初に書かれた論文の最初の言葉、これ〔レジュメ 3 ページの〕②ですね。

吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず^{*12}。

とこう言っていますね。私たちが世の中に生きていくには、きっと一つの何があっても壊れない立脚地がなくてはならない、とこう言っていますね... その3行下ですね... そこには「処世に於ける完全なる立脚地」とありますね。つまり、世に処するための完全な立脚地。このことがはっきりとしてくる道筋、これが「精神主義」だ、とおっしゃっている。つまり、清沢先生は「精神主義」というものを私の心の問題じゃなくて、私たちが今ここにこの時代にこの社会に生きているという自分として、その主体を確立する、そのために「精神主義」というものが必要なんだ、とこうおっしゃっているわけですね。ですから、清沢先生が言う「自己」というものは、他者と切り離されたり、社会と切り離された「自己」ではありません。むしろ、本当に社会と、他者と関わっていくための「自己」なのだ、と言っていいと思いますね。

そのことを通しながら次ですね、「天命に安んじて人事を尽くす」という表現について少しお話に入っていきたいと思います。では、10分ほど休憩したいと思います。

^{*12} レジュメ, p. 3, II-(2)-②.